

鈴木善幸氏（元内閣総理大臣）に聞く

苦労を共にした間柄

―聞き手・宇治敏彦



第1次池田内閣の閣僚記念写真。初入閣の鈴木善幸厚生大臣（池田首相の右2段上）と大平正芳官房長官（2列目左端）（1960年7月19日、首相官邸で）

最初に会ったのはワシントンで

——ボチボチと思い出されながら、お話を伺いたいのですが、鈴木先生が大平さんと最初に会われたのは、いつ頃のことでしょうか。

鈴木 大平君の大蔵省時代というのは接触がないんだよね。一番最初に会ったのはね、ワシントンだったな。彼が経済安定本部の公共事業課長かなんかやっておつてね、アメリカへ出張で視察に来ておつた。朝、食事に出掛けたら、たまたまホテルの食堂で会いましたね。その時は、僕はすでに当選二回で、大平君は大蔵省から安定本部に向向しておつたんだな。その時、お互いに名乗りあつたんだね。それが最初の交流であり、接触ですよ。それから、僕はGHQの招待でね、四人の議員団をつくつて、三月間、ほとんどアメリカ全土を視察して廻つたんだよ。

——その議員団は、どんな顔触れでしたか。

鈴木 参議院から二人、衆議院から僕を含めて二人、計四人だよ。富永格五郎さんという北海道選出の自民党、参議院は木下辰雄さんという全漁連の会長をやつた人（緑風会）だよ。それから千田正という岩手県出身で革新系無所属の人。

——先生を含めて、水産関係の人が多かつたのですね。

鈴木 そうだね。昭和二六年（一九五一年）頃です。

——コカコーラを飲んだというのは、その当時の話ですか。

鈴木 そう、初めて飲んだ。(笑い) 大平君とは期せずして、国内で会わないで、アメリカで最初に会った。

——その時が、全くの初対面だったのですか。

鈴木 いや、顔は何回か見ているかも知らんけど、言葉を交わして、しばらく話し合ったのは、初めてだったね。

——それで昭和二七年に、大平さんは初当選するわけですね。先生と一緒に吉田派だったですね。

鈴木 僕はその当時、当選四回でね、丙申会という名前前で、源流は吉田茂さんだ。その旗の下に、林譲治さん、益谷秀次さんという党の長老が二人おられた。それから池田勇人、佐藤栄作、周東英雄さん、愛知揆一君、田中角栄君、橋本登美三郎君だとかね。それが池田グループと佐藤グループに別れたわけだね。それで私は池田グループに行ったわけだけれども、林、益谷両長老も池田さんを何とか、戦後の経済復興の先頭に立って仕事をしてもらおう、ということに高く買っておってね。

また、池田さんは酒が好きだったからね。新聞記者諸君なんかを相手にして、夜遅くまで飲んでおつたしね、非常に豪放な人だったから、政党人としての林さん、益谷さんもね、佐藤さんよりはどちらかというと、池田さんを可愛がったな。その下に、周東さんがおった。前尾繁三郎、福永健司、小山長規君とかね。小坂善太郎君もおつたですが、彼は池田、佐藤の両グループに出たり入ったりしていた。それから、大平君はじめ黒金泰美君だとかね。

——それで、昭和三五年に池田内閣ができるわけですね。先生が郵政大臣になられて、大平さんは官房長官ですけれども、先生が見ておられて、官房長官としてはどうでしたか。

実 鈴木 池田内閣を切り盛りしておったのは大平君ですよ。あの当時ね、「寛容と忍耐」というキャッチフレーズを掲げてね。非常によく、あっちこっちに心を配って、よくやっておったよ。単なる官僚じゃなかったな、やつぱり、その点は。大平君は、苦勞人で、政治手腕もあつた。だから党内の關係者にも信賴が篤かつたから。まあ一言で言つと、敬虔なクリスチャンだよ、彼は。

——池田さんにも結構、忠言したりしてましたね。

鈴木 相当、直言しておつたけどね。割合にね、池田さんは、ああいうザックバラんな人だから、前尾とも黒金とも、宮澤喜一とも、われわれともね、腹を割って話し合う、親分氣質があつた。僕は、昭和二二年の最初の選挙で、漁民運動をやっておつて、賀川豊彦だとか、千石興太郎とか、そういう農業協同組合、生活協同組合の陣営の人達と一緒にやっておつたが、協同組合運動に限界を感じましてね。そこから政界に身を投じたわけだが、そんな関係もあつて、平野力三に「ぜひ、社会党へ来てくれ」と言われた。僕は岩手県社会党には全然、関係ないわけですから、本来であれば岩手県の社会支部から推薦されて、党公認候補になるわけだが、そういうことがなくて、いきなり党本部公認候補として天下つて、選挙をやつたわけです。当時の社会党というのは、労働組合運動をやつたり、農民運動をやつたりした人達、何遍牢屋にぶち込まれたとか、そういう闘争歴でハクを付けたりといったのが幅を利かせておつた政党だつたよ。まあ、学究的な人もおつたけどもね、鈴木茂三郎だとか、そついう人達もおつたけれども……。

——それから自由党へ移られる……。

鈴木 僕は、アイオン台風、キャサリン台風という大災害のある年でね、一一月頃、冬も押し迫つ

た頃にな大変な台風があつてね。それで盛岡から宮古、山田へ行く山田線は寸断されちゃつて、陸の孤島になつた。それで食糧でも何でも、三陸汽船で塩釜から、あるいは八戸から、救援物資が届けられたんです。それで、地元の宮古市議会、隣接町村なんかの議会で、皆んな決議をして、この災害復旧には地元から只一人、国会に出ている鈴木善幸を窓口にして、やるほかないと。それには社会党では困る、自由党に入ってくれなければ困るという決議を、皆んなしちやつてるんだよ。そうは言われても、僕は社会党員を標榜して当選したんだから、そうは簡単に党籍を変えるわけにはいかんと言つて、押したり引いたりしておつたんだが、そのうちに解散になつたんだよ、衆議院が。それで、丸裸になつたわけだから、今度は党籍を変えた候補者として、信を問うことにした。岩手県連会長であつた小沢重喜さんね、小沢一郎君のお父さんが、それじゃ「僕が案内して吉田（茂）さんにご紹介しよう」と一緒に行つてくれて、それで吉田のじいさんに会つて、僕は自由党へ入党したんです。そういう経緯があるんだが、そんな関係もあつて、僕は吉田派であると同時に野人だから、林、益谷両長老に師事して、だいが政治家としての訓練を受けたんです。

——池田派に入つた経緯はどうでしたか。

池田派に入つた経緯は何か

鈴木 池田首相の周辺には、大蔵省出身の前尾君だとか大平君だとか黒金君だとか、宮澤君だとかがあるわけだ。僕はそういうようなことで、すうつと距離を置いたような格好になつておつただけど、まあ大衆運動なんかやつたりしてきたもんだから、割合に行動力もあつたんだろうな、だいが池田派

実の中でも重宝がられるように、だんだんできてきた。で、池田さんも、「夜、帰りに寄れや」と言うようなこともあつて。池田さんも二次会、三次会をやって一一時、一二時頃に帰ってくるんで、それまで座敷で待っているわけだ、奥さん相手に。そこへ帰ってきて、いろいろな話をするわけだ。しかし、翌朝また電話が掛かってくるんだ、池田さんから。「昨夜、君は何かこういうことを言っていたよのだがね。俺、酔っぱらつておつて、よく判らないから、朝、寄ってくれ」と言うんで、寄ると、

「判つた。それを一つ、やろつや」というようなことだね。そういうことで、だんだん僕を知つてくれて、それでだいぶ重要視されるようになった。だから、面白い話になるんだけれども、黒金君なんかね、「鈴木君は、池田派では最初、お手伝いさんだと思つておつたんだが、いつの間にか信濃町の奥座敷に胡座をかいていて、われわれを指図しておつた」と。(笑い)

——それは昭和三五年の自民党総裁選挙の時ですね。当時、大平さんはどちらかと言えば、やはり兵站部を、鈴木先生は各派との交渉をされていたと思います。鈴木先生は池田内閣で官房長官を退かれた後、少し間を置いて、佐藤内閣で厚生大臣になられますね。ところが大平さんは、佐藤内閣では割合、冷たく扱われているわけですね。どうしてなのですか。

鈴木 それはね、どうもよく判らないんだが、佐藤さんは岸信介さんの関係もあつたりして、自分の後は福田赳夫に持つて行こうということじゃないかな。しかるに田中角栄が、若いのにどんどん派内の力をつけて来た、田中グループというものを作って強引に自分の後をやらうとしていると。こういうこともあつたりして、どうもその点が、田中に対しては面白からざるものが内心あつた。しかし、自分の派だからね。福田は岸さんの直流の人間であるけれども、やはり他派だからね。そこに露骨に

田中でなしに福田だと言うわけにはいかない面があったのだ、佐藤さんは。その手に余っておる怪しからぬ角栄とガツチリ手を結んでるのが大平だから……。

——あー、なるほど。これは、もう冷蔵庫に入れて置くしかないよ。

鈴木 一遍は通産大臣にしたけれども、日米繊維問題があつて、なかなか交渉がうまく行かなかつた時に、途中で事もあろうに、宮澤（喜一）に通産大臣を代えたんだ。あの時の大平の憤慨というか切齒扼腕ぶりは、今だに僕の眼には焼き付いておるがね。まあ、そんなこともあつて、爾来、宮澤と大平の間は良くなかつた。

——大平さんと佐藤さん自身が、何か悪いきつかけがあつたんですか。NHKの島桂次さんなんかは、よく「オトウチャン、あんたは実質的に佐藤内閣をつくるために奔走したでしょう」と、池田さんの裁定を佐藤にするのにな、あんたが佐藤さんを総理にしたのに、事もあろうに、あんたが冷飯を喰わせられているのは、おかしいじゃないか」と、よく言つてましたけどね。

佐藤さんに冷飯を喰わせられた理由

鈴木 どうも、福田・田中の関係が裏にあつた。僕は、そういうようなことだつたのだなと思う。佐藤さんは僕に対してはよかつた。ということは、官房長官の退き際に割合に淡々としていたんでね。そんな関係もあつてね。半年後に佐藤さんが自前の内閣を組閣した時に、僕は厚生大臣になつた。そして、次の改造の時も、僕はまた厚生大臣に残つた。それから、その次の改造の時も、福田が幹事長だつたけれども、「ここに佐藤総理もおられるんだが、今度、君は横滑りでご苦勞だけでも、農林

実 大臣をやつてくれんか」と、電話が掛かつてきたりしてね。しかし、「それは勘弁して下さいよ。俺、就 二回、連チャンで厚生大臣をやつただけでも、村内の諸君に相済まんと思つているくらいなんで、も 華 う勘弁してくれ」と言つて、僕は固持して、ならなかつたわけだ。それで、一年たつて総務会長にな 去 った、佐藤内閣でなつたんだよ。それからだよ、九回、総務会長をやつた。

——しかし、その歴史から言つと田中さんとは鈴木先生は非常に親しかつたから、佐藤さんはやはり本当なら、角さんの仲間である先生も敬遠しなけりやならないんじゃないですか。

鈴木 やつぱり田中と大平みたいに、兄弟みたいに相談しながら、すべてやつていふといふのと、僕はちよつと、また違うからな、それは。

——角さんは、鈴木先生には非常に信義感を持つていたじゃないですか。

鈴木 僕とは同期生だもの、同期の桜だもの。昭和二二年組だもの。

——大平政権をつくるという展望、まあ三木武夫さんが途中に挟まつたから、椎名裁定でいろいろ狂つた場面がありますけども、先生なんかのお考えは、やはり田中派とずうつと友好關係を保つて行くことによつて、大平政権へ繋いで行くんだというお感じじゃなかつたかと思つてんですけども……。

鈴木 そう、その通りだよ。

——その間に、大福提携とかいろんなものが挟まつてきて、その辺はどういうふうに評価されますでしょうか。

鈴木 だいたい、あの時は田中派が党内で第一勢力だろう。衆議院でいうと当時ね、五〇名ぐらい持つておつた。大平派がどんどん集まつてきて四九名だつたよ。だから、田中派と大平派があれやる

と、それだけでももう衆議院は過半数に近いんだよね。そうすると、田中、大平が自民党を牛耳って行く、何でも数で押し切って行くというようなことで、福田、三木、中曽根この三派が連携をして、対抗するようになってきた。四十日抗争から何から、全部この図式だよ。

——そうですね。だけど、福田政権ができるについて、先生もタッチされたと思うんですけども、例の念書、これはもう昔の話だからいいと思いますが、保利茂さんは立ち会ったんですか。サインはしなかった、という話ですが……。

福田・大平盟約の介添人として

鈴木（品川の）パシフィックホテル。保利さんは立会い人だ。サインはしない。それは、福田と大平の盟約だからね、立会い人は署名はしない。福田の介添人は園田直、大平の介添人は僕と、これは署名、捺印して花押をやってるわけだ。保利さんは立会い人で見てるだけ。だけど、それを裏切るうとした福田に対して、保利さんは非常に「けしからん奴だ」と怒っていたな。

——あれ、最初に総裁の任期を三年から二年に短縮するということになったでしょう。じゃ、二年経ったら福田さんは大平さんに確実にバトン・タッチをすると、その時、思われましたかね。どうだったですか。

鈴木 それは、その通りですよ。それは、あんなに大平がね本当に気持ちよく、あっさり自分に先に譲ってくれた、「あなた長幼序ありだから、やんなさい」と。これ、全く意外だったのじゃないかな、福田は。だからね、「いや、もう二年でなくていい。一年でも結構だ」と。こうまで言ったんだ

実
からね。

就 ———— そうですね。

華 鈴木 もともと総裁の任期は二年だったんだよ。それを党則を変えて三年にしたばかりだったんだ。一回だけ。

——— そう。田中さんがしたんですね。

鈴木 それをまた元に戻したんだ。これには、長くても一期二年だよということ、一年でもいいと言った福田だから、結構ですということになっていてね。ああいう署名になったわけだ。

——— その約束を反故して、再選されようとしたわけでしょう。

鈴木 そうそう。

——— これは何ですか。やっぱり総理をやったら辞めたくないということですか。

鈴木 いやー、そういうもんだよ。権力の座に据わるとね、本人は別としてもその周辺が……。

——— 鈴木先生なんて、珍しいじゃないですか。(笑い)

鈴木 それで、そういうようなことで、結局、党則が公選制になったわけだからね、国会議員だけじゃないわけだから、党員投票は。これは党則で、もうそうなっているわけだから、党改革のあれで。福田が総理総裁、大平が幹事長。しかし地方の党の組織や何を指導し、面倒を見て、実質的に掌握しているのは幹事長だからね。それを一年半もやっているわけだから、大平の影響力がずっと全国の支部へ浸透しているわけだから、総裁選をやったら意外や意外、あれ地方党員一〇〇〇人の一票と国会議員の一票としたんだけど、それで約一〇〇票違ったんだよ。それだけ、大平幹事長の影響力とい

うのは、たいへん末端にまで浸透しておったな。あの当時、新聞記者が取材にきて、びっくりしちゃうてねー。福田ご本人も本当に、はね上がってびっくりしたんじゃないか。「天の声にもおかしな声がある」なんて言い出したりして……。

——なんか大平に負けたんじゃない。その後についている田中角栄に負けたんだと……。

鈴木 それはね、田中は国会議員だって五〇名いる、それぞれが地方には皆んな後援会を持っているわけだから、それがフル稼働したら、かなわんわな。それが、大平を全面的に応援したわけだ。そこで、まあ勝った、それで党の役員人事、組閣となるわけだけれども、その時、浮上してきたのが総幹分離論だ。

——あー、そうでしたな。

鈴木 僕の幹事長を阻止しようとする動きだ。(笑い)

——誰がみたって鈴木幹事長だったですよ、あの時は。

鈴木 それで一日、党大会が空転したんだよ。もう大平君も非常に弱ってね、苦慮している。僕は気心がよく判るんでね、翌日、行って僕の問題に拘らずに進めて下さいと。しかし、幹事長をほかの派に渡すわけにはいかないんでね、どうだ邦さんでやるうじやないかということで、斎藤邦吉君を幹事長に据えることにした。

——先生のほうから提案されたわけですか。

鈴木 そうそう。それで、もともと福田側は僕が目標なわけだから。大平総理総裁、鈴木幹事長では何をやらかすか分らないということだからね。それで、こっちは大譲歩したような格好で、斎藤君

実を幹事長にして、それでようやく収めてね。(笑い)

就——やっぱり先生が憎たらしかったんですかね。

華鈴木 どうかね。個人的にはそんなことはないだろうけど……。

去——大平 鈴木体制をとられたら困る、ということだったんでしょね。

拳党協当時の忘れられない思い出

鈴木 それは拳党協の時代や何からね、皆んな、やっぱり大平派で内側を固めて、大平君の言うように舞台廻しができているのは、彼が後ろでちゃんとやっているからだ、(いうことを)皆んな知っているわけだね。

——拳党協当時のことで、ほかに思い出はありますか。

鈴木 これだけはまいったということがあった。ポスト三木を福田にするか、大平にするかという時に、「長幼の序」ということで、それで福田でいいじゃないかということになって、大平君もそれを了承した。ところが大平君は「鈴木君、そのことを派内に話して説得してくれ」と言うんだ。これには弱ったなあー。

——それで、どうしましたか。

鈴木 仕方ないから宏池会の総会を開いて、その席で話をして、皆に納得してもらったが、皆は「大平で」と思っていたのだから。あの時は本当にまいったよ。

——今から振り返えると、あの時代というのは、まさに怨念政治でしたね。大平さんも、そういう

中で戦死したような感じがしますけれども。ああいうことがなければ、もっといろんな政策とかできたかも知れないですね。

鈴木 本当にね、僕は少なくとも二期四年はやってもらいたかったと思うね。ああいう政策にも明るい、外交、財政、経済ね。そして、田園都市構想なんてものを打ち出したりしてね、それをプレーンの人達を活用して、実に立派な政策文にまとめてね。大変な情熱を傾けて取り組んでおったもんだ、国政にね。それがドロドロした、ああいう怨念政治の渦の中で、本当に命を縮め、結局、何もできなかったわけだ、仕事は。哲学を持ち、政策に明るい、行き届いた素質をもっているながら、それを実行に全然、移せなかったわけだから。

——先生と大平さんとの関係で一番印象に残っていることは何ですか。

鈴木 やっぱり、前尾から大平へのバトンタッチをした時のことかな。佐藤三選の対抗馬に前尾さんが立っただけで、歯切れが悪かったんだね。横綱と前頭との相撲のような結果になってね、総裁選にならなかつた。何だ二代目は。こんな状態では、折角の保守本流を目指し、名門派閥の池田派も宏池会も駄目だと。それで、ピッチャー交代をすべきだ、という機運が若い連中から出たんだ。特に大平君の周辺のね、伊東正義だとか、服部安司だとか、田中六助だとかいう連中から、だいが強く出た。その時ね、僕は派内の中堅・若手のまとめ役的な仕事をいろいろやっておったものだから、伊東や田中やなどと呼んでね、「何をやっているんだ、お前は。将来ある大平君を、城山の西郷（隆盛）さんにしちゃ駄目だよ。軽拳妄動するな。俺に任せい」と言っただけで抑えておいてね。それで僕は前尾さんに四回、会ったよ、差してね。

大平君からも、築地の、池田さんがよく行く広島の女将さんの栄家で、ちょっと会いたいというもんだから会ったら「僕を慕って若い連中がいろいろやって鈴木君に見苦しい心配をかけているようだけれど、一つこの際、外からいろいろアドバイスしたり、いたわりするんじゃないに、いつそのこと僕と一緒にあって、僕のところの同志として、若い連中の面倒を見てくれんか」という相談があつたね。非常に誠意のある、ほんとうに熱意を込めた話だったもんだから、若い連中が大事なんだ、この連中をやはり将来、宏池会の同志として育てていかにやいかんかなと思ひ、お手伝いしようというよくな話をした。それから僕は前尾さんに、いろいろ話をして、前尾から大平へのパトントンタッチがね、若い連中もおとなしくなつて、円滑にできちゃったけどね。

——そして七二年の三角大福の総裁選挙になりますね。

三角大福の総裁選の内幕

鈴木 そういうことがあって、一年二、三カ月たってからかな、佐藤さんの後の三角大福の総裁選挙があつた。その時、大平君にも当然、立つてもらうようになつた。それには、あの時は党内の大勢が福田か田中かという、角福戦争だったよ、実態は。大平君は前尾さんから大平君へ代替わりする時の経緯もあつたりしてか、どうしても総裁候補として、また将来の総理として、大平君はこの総裁選は大事だからね、前尾さんが佐藤さんと総裁を争った時の得票よりは一票でも多く取らないとね、三代目は二代目より駄目じゃないかということになつちまうんだし。やっぱり、将来の有力な総裁候補としての地歩を、まず固めるといふためには、三桁台の線にどうしても上げねばということをやつた。

田中、二階堂進なんかから、中曾根もこういうことで協力してくれることになってるから、マスコミも言っているように、これは福田との戦いだから、一発で決めたいんで、何とか大平君と相談して、大平君に我慢して降りてもらって、うちのほうへ合流してくれないかと、そういうことがあったよ。それは駄目だ。うちにはうちの事情があつて、前尾から大平への世代交代、経緯もこれありだ、そうはいかないということ、やったわけだ。

——大平さんが一〇一票とるわけですね。

鈴木　そして、いま言うように、前尾さんが前回取ったよりも一票でも多くということやって、一〇一票取った。三木が八九票、田中が一五八票、福田が一五〇票。そういうことで、当然、決選投票ということになって、その時は宏池会は大平君が先頭に立って、一致結束して田中に合流したから、一〇〇票以上離して、田中は勝ったわけだね。その時、田中が組閣に入る時にね、だいぶ中曾根からいろいろ注文がついておつたんだ。中曾根大蔵大臣というような案を持っておつたよ。それを僕は聞いたもんだから、総理の部屋へ入って行って田中へ行って、「こういう話を聞くんだけど、どうなんだ」と。「われわれのほうは、それでは困る。派内を収めるわけにいかない。大平派に大蔵大臣を回せ」ということは言わんが、君（総理）のところから出したらいんじゃないか」と言ったら、翌日、植木庚子郎になった。それで、田中内閣において大平君がナンバー２という立場に立ったな。

——あの時、大平幹事長という意見もあつたんですか。

鈴木　それはなかったな。幹事長は橋本登美三郎がなつた。登美さんは佐藤内閣で官房長官をやつた。その時は池田さんから佐藤さんへバトンタッチで総裁選をやらないので、佐藤さんが非常に喜

実ばれてね、池田内閣の閣僚全部を佐藤内閣で引き続き閣僚として使ったんだよ。それで、官房長官をやっておった僕にも、「一つ官房長官をやって手助けしてくれないか」という話だった。「そうはいきませんよ。官房長官だけは、他の閣僚に相談できないようなことも、相談されるわけだから、それだけは佐藤総理の腹心中の腹心から、選ばれたほうがいいでしょう」と言っつて、僕は固辞しておつた。そこへ田中角栄が乗り込んできてね、「鈴木君のことだから、恐らく辞めると言うだろうと思つて、来たんだが……」と言つた。「その通りだ、絶対駄目だ」と。で、とうとう僕だけが退いて、そこに登美さんがなつたのだ。そういう経緯があるんだけど、ポスト池田の内閣であつたものだから、そういう一連の流れがあり、経緯があつたりしてね。三役にしても閣僚にしても、いろいろ選考は白紙の上に書くような具合にはいかないけれども、まあ……。

——大平さんは大変、苦勞した総理大臣でしたな。

大平君は一番、苦勞した総理だつた

鈴木 大平君は田中内閣で外務大臣になつて、日中国交正常化をやつたわけだけどね。僕はね、大平君は戦後の総理としてね、あんなに苦勞した総理はないと思う。その点は、本当に気の毒だつたな。しかし、外務大臣を長くやつたりしたもんだから、外交については総理自体も相当、自信を持つておつたな。アメリカの当時のカーター大統領なんか本当に大平総理を、外務大臣の当時からね、信頼しておつた関係もあつたりしてね。大平君は外交は自分でも自信をもつてやつておつたんじゃないかなあ。ともかく大変な苦勞をしたよ。

——ご覧になって、先生、個人的に大平という人間はどうでしたか。さっきキリスト教徒だとおっしゃったけど、単なるキリスト教徒でもなくて、なんか楽しいところもあつたわけですか。

鈴木 そうだね。後輩や若い連中に対する面倒見は、よかつたんじゃないかな。割合、気配りをしておつたよ、彼は。

——さっきおっしゃつたように、官僚的じゃないわけですね。

鈴木 うん、そう。ただ、大平君の包容力というかな、分け隔てなくずうつと皆んなに、自分が面倒見たり、相談したり、協力したり、苦勞を共にしようというようなことはね……。ただ小さく歪曲された面もなきにしもあらずだがね。

——はは！。

鈴木 興亜院だとか、満州クラブ的なもんですね。なんか、そればかりね。第一次大平内閣の大平から出された閣僚案には、佐々木義武だとか何だかんだとかいうね、皆んな興亜院のグループだった。だからそういうのが、ちよつと誤解を招いたけどね、そうじゃないんだよ。

——そうでしたね。

鈴木 伊東正義君なんか、その点、はつきり公言しておつたからね。大平が総理だから、俺が官房長官をやっているんだ、と。

——今、振り返ってみると、どうですか。大平政治を総括的にみると、どういふことが言えるのでしょうか。

鈴木 僕はやっぱり、大平政治というのは、新しい扉を開いたと思うがね。種子を蒔いたと思う。

それがずつつとね、やっぱり内閣が代わっても、自民党政権の中では、年を経ながらも、紆余曲折がありながらも、大平君が蒔いた種子はやっぱり芽生えてきておると思うね。

(平成十一年二月二日、鈴木善幸事務所取材)

鈴木善幸(すすき・ぜんこう) 一九一一年、岩手県生まれ。農林省水産講習所(現・東京水産大)卒、大日本水産会等をへて四七年、衆議院議員に社会党から初当選、四九年から自民党所屬の政治家として通算一六回当選。池田内閣の郵政相、官房長官、佐藤内閣の厚相(二回)、福田内閣の農相を務めたほか、自民党総務会長を一〇期在任の記録を持つ。八一年、大平首相の急死のあとを受けて第六九代総理大臣に就任、「和の政治」を掲げ、等しからざるを憂える政治を標榜し、行財政改革に内閣の命運をかけた。第四代宏池会会長に就任したが、八二年に退陣、九〇年に政界を引退した。